

## モノづくり技術のイノベーション

Innovations in Manufacturing Engineering

## 巻頭言

## イノベーション創出で逆境を克服

Overcoming Difficulties by Manufacturing Engineering Innovations

米国を震源として、世界中が100年に一度と言われる大規模な不況にみまわれており、多くの企業の業績が低迷しています。東芝のようなモノづくりを生業とする企業がこのような逆境を克服するためには、次の二つのことを実現する必要があります。すなわち、魅力的な新製品をタイムリーに市場に投入することと、既存の主力製品の競争力を大幅に高めることです。これらを実現するには強いモノづくり技術が必要となりますが、今回のような非常に厳しい状況を打開するためには、従来の延長線上で技術を強化するだけではまったく不足で、画期的な新製品の開発や製造リードタイム1/2以下への短縮のほか、製造コストや品質コストの半減化など、モノづくり技術のイノベーションが必須となります。

当社は、このイノベーションを数多く創出するための仕掛けとして、まず活動領域を“先端モノづくり要素技術”、“モノづくりの仕組み”、及び“製品設計技術力”として定義しました。そのうえで、イノベーションと言うにふさわしい大きな成果を上げた過去の事例を集め、どのような形でイノベーションが生まれたかを、“新しい価値の創出”、“発想の転換”、“本質解の探索”、及び“全体最適化”の四つの視点で類型化しました。例えば、全体最適化の視点では、視野を今までより広く持ち、個別では二律背反となる課題を全体像の把握で解決します。具体的には、製造工程で発生した不良を、その工程内ではなく、設計の見直しにより少ないコストで解決した事例や、個々の部品精度を高めて製品の精度を維持していたものを、組立方法の変更で部品精度を緩和しコストを引き下げた事例などがあります。もちろん、これらの仕掛けはきっかけを与えるだけであり、実際にイノベーションを創出するには、仕事以外のときでも心の片隅で常に課題のことを考え、あくなき執念で難題に挑む強い気持ちが必要なことは言うまでもありません。

当社には、創業者であり日本が誇る偉大な発明家でもあるふたり、「からくり儀右衛門」田中久重と「日本のエジソン」藤岡市助から受け継いだモノづくりのDNAがあり、後に続く技術者たちが数々の画期的な技術や製品を世の中に送り出してきました。モノづくり技術の分野で次々とイノベーションを創出することで今回の逆境も克服し、当社の経営方針である“利益ある持続的成長”の実現を目指したいと考えています。

西田 直人  
NISHIDA Naoto

生産企画部長 Corporate Productivity Planning Div.